

## 294. 播磨田東遺跡出土の 土器の紹介

はじめに

守山市は日本最大の淡水湖「琵琶湖」に流入する野洲川の沖積作用によってつくられた、三角州と扇状地の上に立地する。野洲川はその源流が鈴鹿山脈にあり、全長は64km、流域面積は約387km<sup>2</sup>で県下最大である。

播磨田東遺跡は守山市の東端、野洲川の左岸沿いに位置する。これまでに9次の調査が行われ、縄文時代後期の遺物や弥生時代中期から古墳時代中期にかけての竪穴住居や周溝墓などが確認されている。特に、古墳時代中期の竪穴住居からは、滑石を素材とした有孔円盤、剣型模造品、刀子型模造品、勾玉、管玉、白玉などの製品、未製品、さらに滑石原石と緑色凝灰岩の剥片、碧玉製管玉、紅鱗片岩製の石鋸、玉砥石などが出土しており、玉生産が行われていたことが伺える。また6次調査では、古墳時代中期の竪穴住居内から水銀朱の付着した石杵が出土し、集落内での水銀朱の使用の可能性も考えられるようになった。

本稿では、第7次調査で検出した周溝墓と周溝内から出土した土器の紹介をさせて頂き、今後の研究に少しでも活かさせて頂ければと考えている。



図1 播磨田東遺跡位置図



図2 周辺遺跡分布図

## 1. 遺構について

第7次調査では、弥生時代後期の溝(SD-1・2)と古墳時代前期の周溝墓(SX-1~3)などを検出した。SD-1は幅3.8m、深さ70cm、SD-2は幅3.1~4.2m、深さ85cm~1.2mの規模である。SD-2の底近くからは木棺状の木製品が出土している。木製品の性格などについては検討中であり、いずれ別稿で紹介させて頂きたい。

SX-1は平面形が前方後方形を呈する周溝墓である。全長推定14m、前方部長5m、後方部長推定9m、前方部幅3.7m、後方部幅推定10.3mである。周溝の深さは前方部側で30cm、後方部側で約1.2mの規模である。

SX-2は周溝の一辺に陸橋を持ち、陸橋部が全面にやや拡張する周溝墓である。一部のみを検出であり、墳丘の規模は不明瞭である。周溝は深いところで約1.2m、端部の浅いところでは約80cmである。

SX-3は周溝の一辺中央に陸橋をもち、その規模は4.8m×5m、周溝の深さは10~50cmである。

## 2. 遺物について

SX-1~3は全体的に出土遺物が少ないが、周溝の中~最下層出土のもので、残存状況の良好なもののみ図化し、掲載している。

①はSX-1の1区最下層から出土した小型の鉢である。口縁部~体部外面にかけて、タテ方向のハケメが施され、その後ナデにより体部下半はきれいに器面

が整えられ、口縁部~体部上半はところどころハケメが消されている。また、体部上半に孔が開けられているが、焼成後外方向から穿孔したものと考えられる。口縁部内面はヨコナデがされ、体部内面は下から上へタテ方向にナデ上げられ、部分的に指頭痕がみられる。

②はSX-1の2区最下層から出土した受口状口縁甕である。口縁部外面はヨコナデが施され、沈線が巡る。底部付近から頸部外面にかけては下から上に順にハケメが施されている。内面は下から上へタテ方向にナデが施され、指頭痕がみられる。口縁部内面~頸部はヨコナデが施されている。

③はSX-1の3区中層から出土した壺である。口縁部外面はタテ方向のヘラミガキと口唇部にはヨコ方向のヘラミガキが施されている。口縁部内面は剥落と磨滅が著しいため、調整が不明瞭であるが、光沢が認められるので、ヘラミガキが施されていると考えられる。体部外面下半にはヘラ状工具によって削った痕跡が認められる。底部内面は放射線状にハケメを施した後、ヨコ方向のナデが全体に施されている。

④はSX-1の5区最下層から出土した壺である。口縁端部は垂下させ、左周りに沈線を巡らし、2個一対の棒状浮文を貼り付けている。肩部外面には左周りの沈線と山形文が2段づつ施されている。体部外面は磨滅が著しいが、光沢が認められることから、ヘラミガキが施されていると考えられる。体部内面はハケメの後、肩部付近から口縁部に向かってナデが施されて

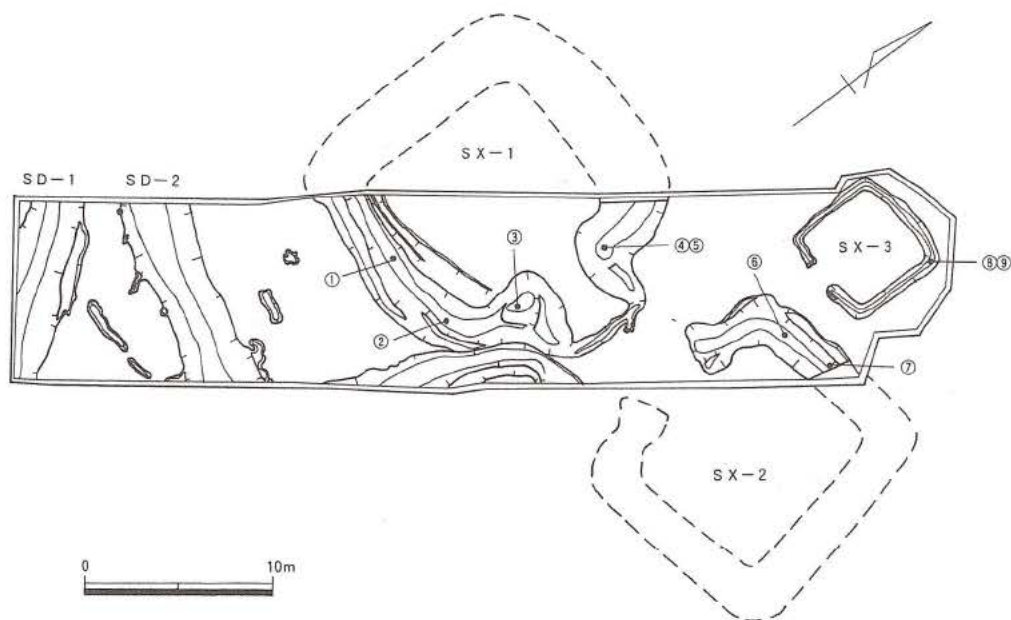
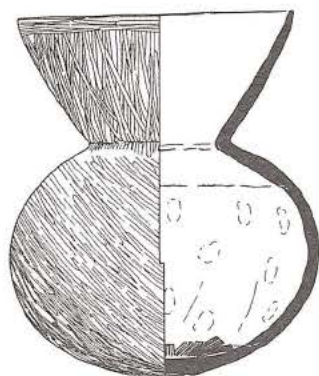
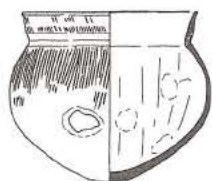


図3 遺構全体図

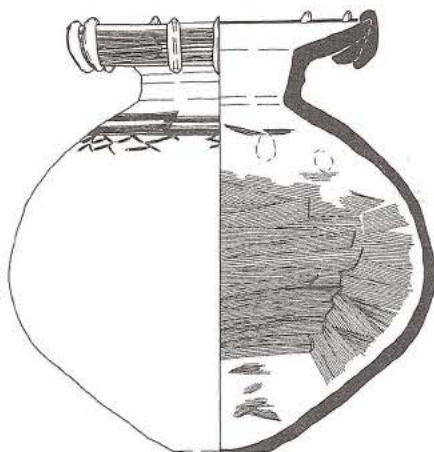




③SX-1 3区中層



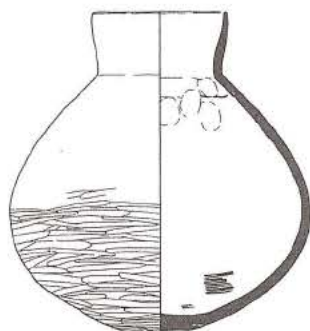
①SX-1 1区最下層



④SX-1 5区最下層



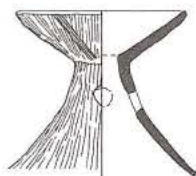
②SX-1 2区最下層



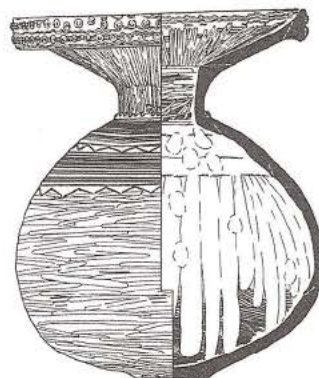
⑤SX-1 5区最下層



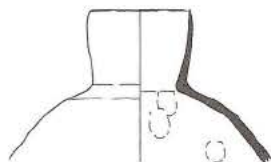
⑥SX-2 1区中層



⑦SX-2 1区最下層



⑧SX-3 sec 8 内下層



⑨SX-3 sec 8 内下層



图4 周溝墓出土土器実測図

いる。

⑤はSX-1の5区最下層から出土した壺である。内外面ともに磨滅と剥落が著しいが、体部外面下半にはヨコ方向のヘラミガキが、肩部内面にはナデの痕跡が認められる。

⑥はSX-2の1区中層から出土した受口状口縁甕である。体部外面には全体にハケメが施されているものと考えられるが、底部に僅かにその痕跡が認められるだけである。肩部内面にはヘラ状工具により削られた後、ナデが施されている。内外面ともに磨滅と剥落が著しい。

⑦はSX-2の1区最下層から出土した器台である。受部と脚部外面にはタテ方向のヘラミガキが施され、その後受部には部分的にハケメが施されている。受部内面は磨滅が著しく、調整は不明瞭であるが、脚部内面はナデが施されている。脚部には外方向から4ヶ所、焼成前に穿孔されている。

⑧はSX-3のセクション内下層から出土した壺である。口縁端部はやや垂下し、波状文が施された後に円形浮文が2段に貼り付けられている。口縁部～頸部外面にはタテ方向のヘラミガキが施され、頸部には刺突文凸帯が巡る。体部外面には全体にヨコ方向のヘラミガキが施され、その後上半部に沈線と貝殻状具を使用し施文した山形文を交互に4段配している。口縁部内面から頸部内面はヨコ方向のハケメの後ヘラミガキがされ、口唇部には波状文が施されている。体部内面下半はハケメが施された後、下から上へタテ方向にナデが施されている。

⑨はSX-3のセクション内下層から出土した壺である。内外面ともに磨滅と剥落が著しく、調整は不明

瞭である。体部内面は指頭痕がみられることから、ナデが施されていたと考えられる。

なお、今回は図化していないが、SX-3の周溝墓内からは水銀朱の付着した土器片も出土している。

### 3. おわりに

野洲川下流域に位置する旧野洲郡と旧栗太郡は前方後方型周溝墓が集中する地域である。なかでも現守山市域を中心とした地域は、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての墓域内に、比較的高い比率で前方後方型周溝墓が築かれていると考えられる。今回報告した播磨田東遺跡は、こうした状況下にあつて良好な資料を追加することができたわけである。特に出土土器は在地よりもむしろ東海的色彩の強い土器を含んでおり、近江周辺地域の前方後方型周溝墓の分布を考えた場合、たいへん興味深い資料を提示したといえるであろう。

(守山市教育委員会 藤原恵美)



写真1 SX-1

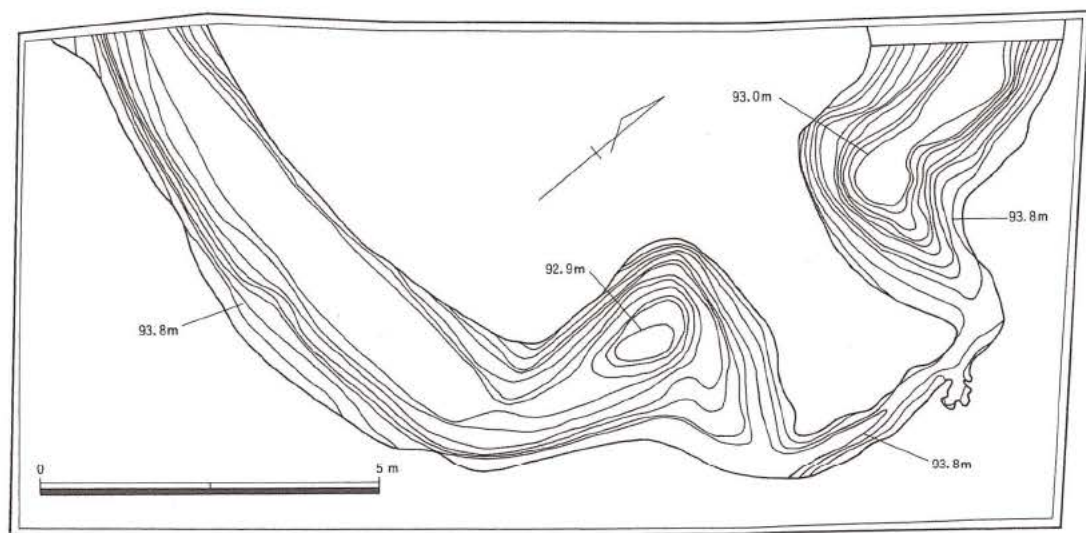


図5 SX-1 コンター図